

平成22年3月15日

平成22年度

事業計画書及び収支予算書

財団法人
神津牧場

平成22年度 事業計画

1. 一般方針

我が国酪農は、一昨年来飼料、燃料、肥料などの価格の高騰に見舞われ、現在も高止まりの状況にあり畜産危機は一層深化した状況と言えよう。輸入資源に依存した加工型畜産から自給飼料基盤を確保した資源循環型畜産へとパラダイムの変更が余儀なくされている状況は変わらない。

こうした現状を見ると、神津牧場の120年余にわたる実践は一つの正しい方向を確固として示していると言えよう。すなわち、条件的に厳しい中山間地帯で、独特の牛乳を産出するジャージー種牛を放牧飼養し、自給飼料を主体にした土地利用型酪農を成立させてきたことは、我が国畜産の将来方向を示唆するモデルケースとして位置づけられるものであり、さらに発展させるべく事業の足場を固めていくことが肝要である。

牧場内においては、基盤である放牧飼養技術の科学的実践の充実を図るとともに、加工・販売まで一貫した経営基盤を確立することを目指す。さらに、牧場の立地条件を活かして、緑資源の活用による牧場の多面的機能の発揮も積極的に図っていく。来場者に緑あふれる良好な環境の中で、新鮮で美味しい乳製品を提供することにより満足感を与え、また、山地酪農、草地畜産の普及・宣伝のため各地で行われるイベント・物産展にも引き続き積極的に参加して、畜産理解の醸成に繋げていく。

以上の取組みに見られるように、安全・安心な畜産物の生産にとどまらず、ふれあいや環境保全など多面的な機能を有する経営体として、今後の我が国畜産のあるべき姿を総合的に実証していくことを目指す。併せて、公益事業の柱である畜産関係の調査・実証事業の実施については、各種団体からの委託事業、独立行政法人や自治体の試験研究機関等との共同調査研究や技術開発を積極的に進める。すべての事業項目において、実習生・研修生の受け入れも積極的に行う。

最近の財団法人を取り巻く環境としては、公益法人の見直し期間に入り、当財団も公益財団法人に移行することを目指し、4月以降に申請手続きを行う。そのためには、事業の明確化と事業内容に関するチェックポイントのクリアが必須条件となるが、申請の過程で明確化していきたい。

各事業については、昨年度より若干組み直して次のとおりとする。

- 1) 放牧酪農におけるジャージー種牛飼養技術の確立事業
 - (1) 草地管理及び飼料生産事業
 - (2) 放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給事業
 - (3) 放牧受託（公共育成牧場）事業
 - (4) 山羊の種畜配布事業
- 2) 畜産物の利用・加工技術の開発事業
 - (1) 乳製品の利用・加工技術の開発事業
 - (2) 肉用肥育・加工事業
 - (3) 放牧養豚事業
- 3) 牧場の持つ多面的機能の発揮促進事業
 - (1) 緑資源の高度利用
 - (2) 家畜とのふれあい及び畜産理解醸成事業
- 4) 共通事業

- (1) 副産物の払下事業
- (2) 実習生・研修生の受入れ事業

2. 事業に関する事項

<公益事業>

1) ジャージー種牛の飼養事業

(1) 草地管理及び飼料生産事業

土地利用型畜産の基盤は草地であることに鑑み、夏の放牧地の管理のみならず、冬場の飼料確保のための採草地ともに、気象条件を見ながら適正な植生管理技術を確立することを目的とし、種々の施策を行う。

草地管理としては、引き続き当牧場に貸与されている無線草刈機を有効に使用して、雑草及び周囲の雑木の伐採を行い、草地面積の維持・拡大の方策を図っていく。特に、峠地区及び桶萱地区の未利用草地の再草地化を行い、草地改良のノウハウを取得する。加えて放牧草地の一部については簡易更新法により追播を行い、草生の改善を図っていく。

植生維持には適正な施肥管理が欠かせないが、肥料の高騰という事態を受けて、また、将来的に有機畜産をも展望して、無化学肥料栽培の可能性を追求する。その手段としては、土壤検定結果に基づき土壤改良を中心にすすめていくとともに、堆肥化システムを確立していく。堆肥化システムについては、畜産草地研究所とタイアップして、きのこの廃菌床の活用法を確立していく。

さらに、採草した飼料については、細断型ロールベアラの導入とともに畜産草地研究所の協力を得て、乳酸菌製剤の添加効果を見るなどロールベアラの品質向上に引き続き取り組む。

(2) 放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給事業

最近ジャージー種の導入が盛んで、神津牧場としては120年のジャージー種供給の歴史を踏まえ、能力改良事業を進めるとともにその供給基地としての機能を今後も果たしていく必要がある。

土地利用型畜産の展開は放牧が基本であるが、我が国の加工型畜産においてはほとんど顧みられていなかった。我が国畜産の土地利用型モデルとしての役割が求められている中で、飼養技術として乳牛の放牧酪農技術の向上を図るとともに、牛群検定などの結果を有効に活用し、繁殖管理の徹底、選抜淘汰の実施により、産乳能力の向上を図る。特に、授精技術の向上に努め、確実な繁殖結果が得られるよう努力する。これを受けて、一般からの種畜の供給要請に応じていく。

本年度、成牛は90頭から始まり、淘汰20頭、育成からの繰り上がり17頭で、年度末には87頭を見込んでいるが、初妊牛4頭、育成牛5頭程度の配布を予定している。

(3) 放牧受託（公共育成牧場）事業

昭和40年代より群馬県の公共育成牧場として、一般農家の育成牛を夏期受託してきたが、群馬県が撤退した後も財団法人の独自事業で公共育成牧場の機能を果たしている。さらに、県の育成牧場協議会の会長牧場としてリーダーシップも発揮していく。一昨年度より、日本草地畜産種子協会の「公共牧場機能強化拡充推進事業」を受入れて、機能強化策として草地更新技術の研修・普及に努めてきたが、今年度は、育成牧場の適正管理について実施する。

夏期放牧受託事業は、本年度も桶萱地区で継続して行う。受入は県内外を問わず、ジャージー種を中心に30頭程度を見込み（自家産を入れて受入可能頭数の50頭になるよう

にする)、人工授精も実施する。繁殖管理を確実にを行い、受胎成績の向上に努める。受託牛の健康管理については、家畜保健衛生所の協力を仰ぐ。

(4) 山羊の種畜配布事業

山羊の乳肉利用の他に動物とのふれあい機能の増進や雑草管理などに山羊の需要は高まっているが、その供給体制についてこれまで担ってきた独立行政法人家畜改良センター長野支場がその業務を停止したことから、神津牧場を始めとする民間団体が協議会を結成して引き受けることとなった。神津牧場は、財団発足当初約10年間は山羊の飼養のメッカとして機能してきた経緯もあり、また、山羊の登録制度による血統の維持や優良種畜の配布は公益性があることから、長野支場の業務を引き継ぎ、種畜の増殖・配布を行っていく。

2) 畜産物の利用・加工技術の開発事業

(1) 乳製品の利用・加工技術の開発事業

我が国の酪農界においては、分業化が進み、飼料生産、飼養と搾乳、加工及び流通・販売が切り離されている。今後の酪農経営の改善にはエサ作りから製品化までの一貫性が必要であり、総合的な経営戦略が求められる。神津牧場においては、創設以来この一貫経営についてのノウハウが蓄積されており、乳製品の利用・加工技術の開発はその最終工程として重要な役割を果たしてきた。

現在までに、120年の歴史を持つバターに始まり、チーズ、パック牛乳、ヨーグルト、アイスクリーム、ソフトクリームについて独自の製品化を実現し、ジャージー牛乳独特の風味を持った神津ブランドを確立し、市場の評価を得てきており、その供給を継続する。

しかし、消費者のニーズは多様化し、また、牛乳離れなど消費低迷が危惧されている状況に鑑み、さらなる新機能の解明、新製品の開発に取り組まなければならない。本年は、ジャージー放牧牛乳の持つ機能性成分の解明を畜産草地研究所及び日本大学生物資源学部等との協定試験等を実施して進めるとともに、そのプレミアム化を推進している日本草地畜産種子協会の認証事業にも積極的に参画していく。

数年前から取り組んでいる山の実園のサルナシの結実をまって、それとのコラボレーションを図って山村振興の一助となるべく、アイスクリームやソフトクリームなどの新製品も開発する。

(2) 肉用肥育・加工事業

近年、ジャージー種の放牧牛肉がおいしさの成分や機能性成分を多く含むことが明らかにされてきている。神津牧場の放牧牛肉についても、九州沖縄農業研究センターとの共同研究によりその一端が明らかになってきているが、これらを踏まえた肉製品の積極的な開発を行い、ジャージー種牛の新たな産業を開発していく。

雄牛を活用する肥育事業は、放牧肥育の有効性を示すために本年も継続して行う。素牛は二歳までは放牧を主体に飼養することで、健康な牛作りとコストの低減化を図っているが、その後の仕上げ肥育については4か月程度に期間短縮を図ることに目処が立ったので、これを基本にレストランでの調理への供給を行い、実用的な可能性を探っていく。本年の仕上げ出荷は、鉄板焼き及び食堂用として3頭程度、卸業者を通じて一般のレストラン等に31頭を予定している。生産された牛肉は、全部位の有効利用を目指して、美味であると評価の高い串焼きを始め煮込み、ハンバーグにしてイベント等で対面販売によって評価を探りつつ普及の可能性をみる。

また、経産牛の廃用についてはレトルトのカレー、ハヤシ、シチューに加工して一般に販売するとともに、新しく挽き材としてハンバーグやハム、ソーセージ等への加工も試みる。

(3) 放牧養豚事業

上記(1)の乳製品の加工事業から出る副産物の脱脂乳、ホエー、バターミルクなどはまだ栄養分を多く含んでいるためその有効活用が求められている。これらを餌として有効活用するための放牧養豚は、脱脂乳については体重20kg程度の子豚で導入し、110kg位で出荷することでほぼ飼養技術が確立してきたが、ホエーなどについても試験を実施する。精肉は、ハム、ベーコン、ソーセージに加工して付加価値を高め、一般消費者の評価を得る。

3) 牧場の持つ多面的機能の発揮促進事業

(1) 緑資源の高度利用

神津牧場の立地を活かしたグリーンツーリズム活動は、財団法人設立以前から連綿と続けており、来場者に牧場を開放して便宜を図っている。牧場内には散策経路を整備して貴重な植物を見ることなどもできるようにしており、さらに、牧場を基点とした近在の山々への登山者も多数おり、年間で10万人程度の来場者が見込まれる。

現在、畜産草地研究所などとの共同研究で、牧場内における野生動物の生態調査を行っているが、シカ、イノシシなどの生態が明らかになりつつあり、これらとの共存を図った自然体験プログラムを構築して、新たにエコツーリズムを実現していく。

(2) 家畜とのふれあい及び畜産理解醸成事業

酪農教育ファーム及びふれあい事業の活動に資するため、ポニー、ウサギ、山羊、羊等の飼養展示を行い、積極的に動物との接触体験ができるように工夫する。特に山羊については家畜改良センター長野牧場と連携して、ふれあいを図ると同時に園地の雑草管理を行う場面でもその実用性を検討していく。ウサギについては、繁殖も行い一部配布も行う。

畜産理解醸成を図るべく酪農教育ファームとして、これまで整備された施設を活用し、幼稚園から高校生までを対象に各種牧場体験の受入れを行う。また、宿泊型の牧場体験も各関係機関と連携して実施していく。

インターネット環境が整ったことから、ホームページの充実を基軸に自前の情報発信を積極的に図っていく。また、一般の来場者・見学者には、従来と同様パンフレット・チラシ・ビデオ等も準備して対応する。

4) 共通事業

(1) 副産物の払下事業

牧場内で生産されるジャージー牛乳を原料に、安全・安心・高品質な各種の乳製品を製造し、消費者の評価を探っていくとともに、財団の財政基盤を確保するため、場内の売店のほか各地の道の駅などに卸して積極的に販売に努める。また、インターネットを通じたセット物の進物販売など新規の開拓に積極的に取り組む。直接販売は、各地で開催されるイベント等に参加してすすめる。また、牛乳は製菓・パンの原料としての需要も強く、新分野の開拓をしていく。

(2) 実習生・研修生の受入れ事業

年間を通しての学生の実習、各種技術研修等のほか、各種団体からの様々の要望について、草地管理、家畜の飼育から乳製品の加工及び販売まで一貫した態勢で行っている立場から、対応していく。

<収益事業>

牧場の散策や山登りなどで訪れる来場者のため、売店・食堂・宿泊施設などの営業を行う。

売店は、乳製品及び乳加工製品と地産地消を念頭に置いた近在の特産品などの品揃いを行う。

食堂については、牧場の特性を前面に出したメニュー構成にしていく。特に、牛肉の評価を得るために、鉄板焼きコーナーや特設コーナーを設置して新製品の提供をする。

宿泊施設は、改修工事も済んだため、積極的に大学のゼミなど団体の利用を呼びかけていく。

バター作りや手搾り等の体験は、随時できるように体制を維持するとともに、ふれあい用の牧草の販売などにも取り組む。体験館・バーベキューコーナーを活用して団体の受入も積極的に行う。

<参考：平成22年度における外部との共同・協定試験>

- 野生動物調査： 畜産草地研究所 塚田 中央農研センター 竹内 NPO 法人
 - ・牧場内にカメラ・ビデオを設置し、出現動物の種類と数の把握を行う。
 - ・イノシシ及びタヌキによる肥育牛舎の盗食防止対策の実験。
 - ・シカの被害解析と防止策（追払い犬の利用の可能性）を農水省のプロジェクトに応募。
- 山羊を使った雑草管理の実証試験： 家畜改良センター長野支場 小谷 上野動物園
 - ・継続実施、管理地の拡大。
- 育成牧場の機能強化： 日本草地畜産種子協会・畜産草地研究所等
 - ・育成牧場の適正管理の確立。
- ラップサイレージの改善： 畜産草地研究所 蔡義民
 - ・細断型ロールペーラの有効活用と乳酸菌の添加試験。
- 堆肥発酵の促進技術の開発： 畜産草地研究所 阿部 山本・平野
 - ・キノコの腐菌床の有効利用。
 - ・堆肥の肥効試験。
- 機能性成分 CLA 産生に対する大豆給与の効果： 日本大学 梶川
 - ・放牧によって産生される共役リノール酸の増強を大豆によってさらに強化。
- 放牧牛肉の機能性成分： 九州沖縄農研センター 常石
 - ・牛肉の肥育様式と機能性成分の関係。
- 放牧牛乳のプレミアム化のためのデータ蓄積： 畜産草地研究所 梅村
 - ・放牧牛乳の認証に向けた成分調査を継続する。